

瑞医

世界に羽ばたくMEDIPORT

2026.2. VOL.58

contents

極 社会貢献
Social contribution

人 時の人
People in the news

技 研究
Current topics in research

和 お知らせ
Information

地域医療シンポジウム ～なごや医療モデルの将来像～

2025年10月29日水曜日、桜山キャンパスさくら講堂において、学内外の医療関係者、行政機関関係者、一般の方など150名を超える方にご参加いただきました。本シンポジウムは、少子高齢化が進む中で、医療への市民ニーズの多様化や、担い手不足など、医療機関を取り巻く状況は厳しさが増し、安全・安心な医療を継続的に提供していくためには、名古屋市は附属病院群にどのような役割を期待しているか、大学たる名市大は医療人の育成等を通じて市民に何を還元できるのか、地域医療はどのような方向に向かうのか、それぞれの観点から問題を掘り下げる目的として開催されました。

郡理事長の挨拶に始まり、松川市大病院長より附属病院群の役割と医療実践の試みについて、窪田看護学研究科長より看護師教育の現状と附属病院群との連携について、続いて元名古屋市健康福祉局長で本学、平松病院企画局長より、「なごや医療モデル」の内容と、医療・人材育成・行政の異なる観点、立場から、3つの事例報告が行われました。

2025年1月より本学顧問に就任された元厚生労働事務次官の吉田顧問による特別講演では、「2040年」の名古屋はどうなる・どうする」と題して、団塊ジュニア世代が高齢期を迎える2040年に向けた地域包括ケア、地域完結型の医療・介護提供体制の構築の重要性について、医療従事者のみならず、一般市民の方にもわかりやすく語られました。

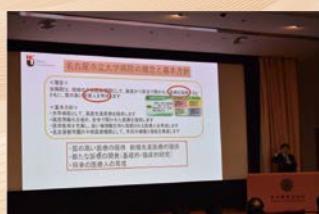
最後に、名古屋市総務局吉木担当局長（市立大学担当）がファシリテーターを務め、登壇者4名と、市民が求める安心・安全な医療を継続的に提供するにはどうすべきかをテーマにパネルディスカッションを行いました。

参加者からは、吉田顧問のまちづくりとリンクした地域包括医療の話や、ゾーン・ディフェンスとたとえられたのは、わかりやすく勉強になったなど、多くの声が寄せられました。

文責：病院統括部 統括企画課



理事長あいさつ



松川市大病院長 事例報告



吉田顧問 特別講演



登壇者 パネルディスカッション



“瑞医の由来”

「瑞医(ずいい)」という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一緒に歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相応しています。サブタイトルの「MEDIPORT」は、「Medical」と「Port(港・空港)」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出航、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

名古屋市立大学が3回連続日本一!日本経済新聞「大学の地域貢献度調査」

公立大学法人名古屋市立大学は、令和7年11月3日発行の『日経グローカル』519号で発表された「大学の地域貢献度調査」で、3回連続全国総合第1位にランクインしました。

このランキングは、日本経済新聞社が全国777校の国公私立大学を対象に、大学が地域社会にどのような貢献をしているかを探る「地域貢献度」の調査を行い、その回答（497大学から回答）をもとに、「大学の組織、制度」、「学生・社会人教育」、「企業・行政」、「大学経営・防災」の4つの分野の得点を合計して順位付けしたものです。

医学部・医学研究科では、子どもたちを対象に最先端の研究成果に触れる機会を提供するプログラム「ひらめき☆ときめきサイエンス」や、社会人・専門職の皆さんを対象に医療従事者の職場復帰支援や最新の医療に対応できる人材育成を目的としたリカレント教育「医療・保健学びなおし講座」を実施するなど、本学の研究成果を幅広い世代へ還元してまいりました。

また、高齢化の進展に伴う市内の救急搬送件数の増加や、南海トラフ地震等の大規模災害発生時における災害医療活動への対応を見据え、令和8年6月には救急災害医療センターを開設するなど、地域医療および防災の両面から、将来を見据えた地域貢献に取り組んでおります。

医学部・医学研究科をはじめとする本学のさまざまな取り組みが高く評価され、今回の結果につながったものと考えております。これは、日頃より本学の活動をご支援くださっている地域の皆さんをはじめ、本学で学ぶ学生、教職員、関連病院の皆さんのご理解とご協力の賜物であり、心より感謝申し上げます。

これからも本学は、地域の発展に努めてまいります。

文責：経営企画部 企画課



「ひらめき☆ときめきサイエンス」実施風景

「ナゴヤ小中学生STEAMラボ2025」にて実験講座を開催

2025年11月15日、「ナゴヤ小中学生STEAMラボ2025」において、「顕微鏡で見てみよう！身近な食品にいる細菌たち」をテーマに実験講座を実施しました。本来は医学部3年生の細菌学の講義で行う内容を、小中学生向けにわかりやすくアレンジしたものです。納豆、ヨーグルト、ヤクルトを材料に塗抹標本を作製し、細菌を紫色（グラム陽性）と赤色（グラム陰性）に染め分けるグラム染色を行い、顕微鏡観察とスケッチにも挑戦しました。参加した子どもたちは、微生物が色分けされて見える不思議さに興味津々で、目に見えない世界が広がる体験に目を輝かせていました。楽しみながら医学への関心を深める、活気あるひとときとなりました。

文責：東部医療センター感染症内科 教授 伊東 直哉



新任教授紹介

先進救急災害医学 船越 拓 主任教授

名古屋市立大学先進救急災害医学講座主任教授に着任しました船越拓と申します。救急医療分野はこの20年で劇的な進化と変化を遂げてきました。これから的人口減少・高齢社会に向けても絶え間ない変化と改善を求めております。また、本年6月には名古屋市立大学病院に救急災害棟がオープンします。救急外来から集中治療、災害医療まで切れ目がない体制づくりと、多職種チームによる温かく質の高い医療をめざします。臨床のみならず、疫学研究や教育に力を入れ、名古屋市の救急医療の中核を担う部門となるよう邁進していきますので、どうぞよろしくお願ひいたします。



船越 拓 主任教授

時の人

坂口志文先生のノーベル賞授賞式に公式ゲストとして参加しました!

2025年のノーベル生理学・医学賞は制御性T細胞を発見した坂口志文先生に決まり、12月10日にスウェーデン・ストックホルムで授賞式が開催された。公式ゲストは14名と少ない中、弟子かつ共同研究者の一人として選んでいただいた。莊厳な素晴らしい雰囲気の中、グスタフ国王陛下から直接ノーベル賞メダルが坂口先生に手渡された瞬間、トランペットのファンファーレが鳴り響き、会場中からの拍手喝采が坂口先生に送られ、言葉にならない程の感動であった。私もここまで地道に研究を続けることができ、良かったと心より有り難く思った。この場を借りて、坂口先生と奥様の教子先生（名市大医学部卒）に改めてお祝いを申し上げたい。心よりおめでとうございます！二度とない感動の瞬間を目の当たりに経験させていただき、本当に有難うございました！

文責：免疫学 教授 山崎 小百合



時の人

文部科学大臣表彰受賞

この度、医学教育等関係業務功労者表彰を賜りましたことは、私一人の力ではなく、日々支えてくださった患者さん、共に歩んできた仲間、そして温かくご指導くださった諸先輩方のおかげです。皆様の励ましと協働があったからこそ、看護の道を歩み続けることができました。心より感謝申し上げるとともに、今後も患者さんの尊厳を大切にし、誠実に看護に取り組んでまいります。

文責：名市大病院 看護部 外来A人工透析室 主任 新海 由美



このたび、医学教育に関連する研究補助業務に携わる者として表彰を賜り、大変光栄に存じます。これも、分野の皆さまと今までに出会った多くの方々の支えがあってのことと深く感謝いたします。これからも教育・研究活動が少しでも円滑に進みますよう自身ができる精いっぱいの力を込めて日々努めてまいります。ありがとうございました。

文責：脳神経生理学 主任 櫻井 輝美



全ゲノムシークエンス解析により乾癬の新規関連遺伝子を発見
—見逃されてきた希少変異と構造変異の関与を解明—

名古屋市立大学大学院医学研究科 加齢・環境皮膚科学分野の森田明理教授が参画する研究グループ（東京大学・大阪大学・理化学研究所・東京科学大学との共同研究）は、日本人乾癬患者1,415例、健常対照3,968例を対象とした大規模全ゲノムシークエンス解析により、乾癬の発症に関わる新たな遺伝的因子を発見しました。本成果は2025年8月、国際誌 *Cell Genomics* に掲載されました。

これまで主流だったゲノムワイド関連解析（GWAS）では検出が困難であった「希少変異」や「構造変異」を網羅的に解析した結果、*IFNLR1*遺伝子座の3.3kb非コード領域欠失が乾癬リスクを低下させる保護的変異であることを初めて明らかにしました。この欠失は皮膚での*IFNLR1*発現を低下させるeQTL*として機能することも示されました。

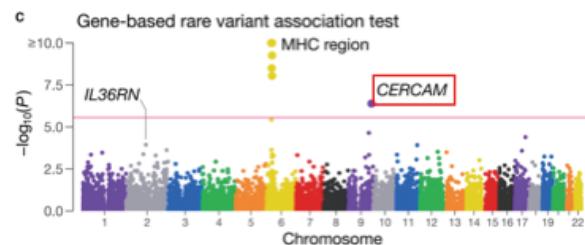
さらに、希少変異の集約解析により、*CERCAM*を新規乾癬関連遺伝子として同定しました。乾癬皮膚での空間トランск립トーム解析では線維芽細胞での高発現を確認。*Cercam*欠損マウスを用いた乾癬モデル実験では、炎症の増悪やT細胞浸潤の増加など、病態形成との直接的な関連も明らかになりました。

本研究は、これまで見過ごされてきた希少変異・構造変異の重要性を示すものであり、乾癬の分子機構解明、個別化医療の発展、新規治療標的の探索に大きく貢献することが期待されます。

*eQTL効果：遺伝子変異が遺伝子の発現量を変化させる効果

文責：加齢・環境皮膚科学分野 教授 森田 明理

乾癬発症リスクに関する希少変異

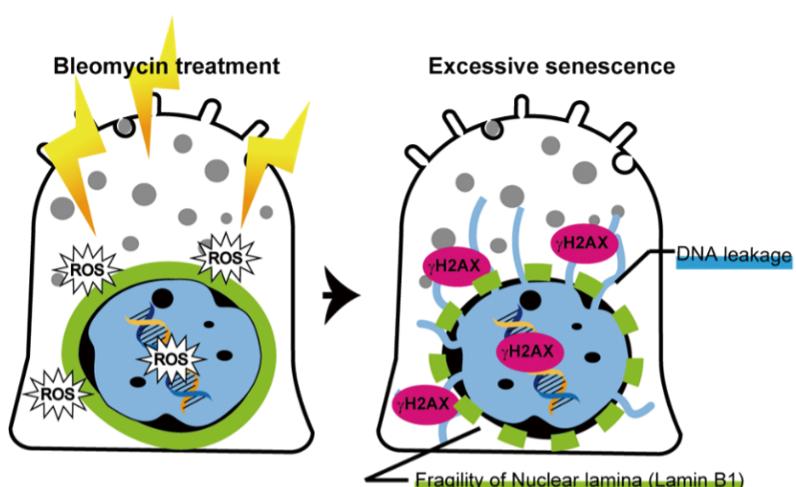


乾癬に関連する新たな感受性遺伝子として、*CERCAM*が有意に同定された。

Sonehara K, Okada Y, Morita A, et al. *Cell Genom.* 19 : 100978, 2025.

抗がん剤ブレオマイシン、肺の老化を促進
—線維化への間接的な関与を解明—

抗がん剤ブレオマイシンは肺線維化を直接引き起こすことがないことを示した。またブレオマイシンは、病態肺において過度な老化状態（DNA修復能の低下）誘導し、細胞死を介した線維化、すなわち間接的な線維化を促すことを明らかにした。合わせて、精密肺組織切片（PCLS）を用いた新たな実験手法により、動物使用を最小限にしつつ、薬剤による肺組織への影響を評価することが可能であることを示した。PCLS法は、薬剤による肺毒性評価だけでなく、各種呼吸器疾患や肺線維症などの新たな治療薬開発にも応用できることが期待されている。（Aging, PMID: 40882007）



文責：神經発達症遺伝学 客員講師 金澤 智

03 研究

Current topics in research

機器分析技術研究会 優秀ポスター発表賞受賞のご報告

このたび、機器分析技術研究会において、本ポスター「誰かがやっているから回っている?技術系総合職が支える見えない業務～受託事業の舞台裏に隠されたその役割～」が優秀ポスター発表賞を賜りました。文部科学省「コアファシリティ構築支援プログラム」のご支援、医学研究科 共同研究教育センターおよび共用機器センターの皆様のお力添えに、心より感謝申し上げます。

本学の共用機器センターは、少人数の技術職員が複数の専門分野を横断しながら研究現場を支えています。私は、機器管理や研究相談に加え、学内外との調整、受託解析立ち上げの運営支援、日々の課題解決といったマネジメント業務を担ってきました。こうした幅広い役割は、限られた人員体制を補いながら現場を動かす“汎用型技術系総合職”ともいえる働き方であり、組織の基盤を支えつつも仕事として認識されにくい側面があります。

今回、“見えにくい実務”に焦点を当てたマネジメント業務が評価されたことは励みであり、この領域の重要性を示すものを感じています。

2025年度は、生物学技術研究会や生命科学研究機器施設協議会でも発表の機会をいただき、全国の共用機器担当の教員・技術職員の皆様と議論を深めた一年でした。全国規模で得られる知見は今後の運営に欠かせず、継続して参加したいと考えています。今回の受賞を励みに、より良い研究基盤づくりに努めてまいります。 文責：共用機器センター 技術職員 山田 晴代



センター長とともに



学外発表の様子

学校作業療法に関する研究プロジェクトが RISTEX 採択へ

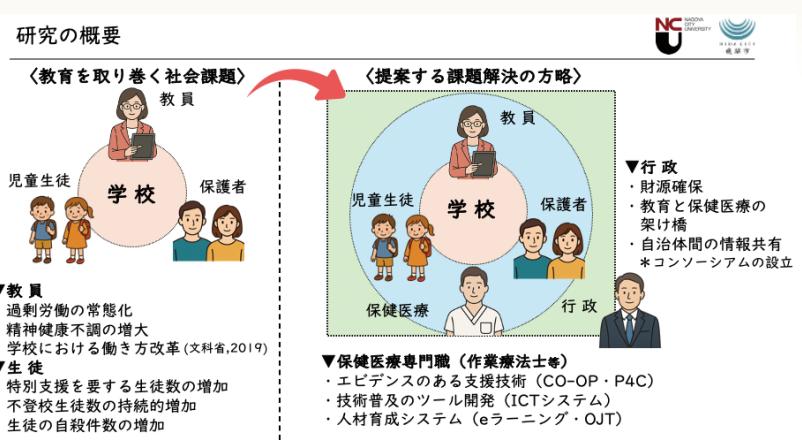
名古屋市立大学医学部保健医療学科リハビリテーション学専攻の塩津裕康が申請した、名古屋市立大学と岐阜県飛騨市の協働による研究開発プロジェクトが、社会技術研究開発センター（RISTEX）2025年度「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（シナリオ創出フェーズ）」に採択されました。

本プロジェクト「教育一保健医療一行政連携によるインクルーシブ教育システムの確立と多地域展開」では、子どもたち一人ひとりの個性や学びの特性が尊重さ

れ、誰もが主体的に学び・参加できる学校環境の実現を目指します。あわせて、教員が本来の教育活動に専念できるよう、教育・保健医療・行政が連携して学校を支える新たな支援体制の構築に取り組みます。

国際的には作業療法士が学校にはいり、インクルーシブ教育に貢献していますが、国内ではまだ未発展の領域です。これまで塩津が飛騨市と共に取り組んできた学校作業療法の成果を基盤とし、持続可能なインクルーシブ教育システムとして発展させます。さらに、このモデルを多地域へ展開するためのシナリオを創出し、全国的な普及を視野に入れた研究開発を進めています。

文責：保健医療学科リハビリテーション学専攻 講師 塩津 裕康



東海がんプロセミナーを開催しました

11月1日に東海がん専門医療人材養成プランの一環として、医療従事者向けセミナーを開催しました。令和5年度から開始されたこのプロジェクトには東海圏にある7大学が参画し、大学院生や医療従事者向けに様々な取り組みを行っています。今回のセミナーは『ACP（アドバンス・ケア・プランニング）・アピアランス』をテーマに、聖隸三方原病院の森雅紀先生には関心の高まるACPの課題や実践と展望について、国立がん研究センター中央病院の藤間勝子先生にはアピアランスケアの基本的な考え方や具体的なケアについてご講演いただきました。ハイブリッド開催で150名以上の方にご参加いただき、参加者からは「勉強になった」「実践に活かせる内容だった」とのお声をいただきました。

文責：医学部事務課



リサーチクラークシップ発表会

医学部3年生は9月から12月にかけて学内外の研究室に配属され、実際に自ら手を動かしながら基本的な研究方法やリサーチの進め方を学び、リサーチマインドを涵養します。ポスター掲示のほか、11月28日には研究成果発表会が開催され、学生たちは学会さながらの雰囲気の中、3か月間に自らが行った研究の成果を発表いたしました。

厳格な審査の結果、以下の方が優秀賞に選出されました。廣田 瞳月さん（免疫学）、横田 千咲子さん・山北 祥也さん（薬理学）、井上 颯太さん（統合解剖学）、近藤 優衣さん（脳神経生理学）、林 美佑さん（神経毒性学）

研究のさらなる発展を祈念いたします。

ご指導いただいた先生方、ありがとうございました。



文責：リサーチクラークシップ幹事 統合解剖学 教授 植木 孝俊

国内・海外より研修生を受け入れました

脳神経生理学では、川崎医科大学から「医学研究への扉」のカリキュラムとして学生2名を受け入れ、認知機能病態学では、インドネシア・ブラウイジャヤ大学から学生2名を受け入れてリサーチクラークシップを行いました。

ブラウイジャヤ大学からの学生は学部2・3年生でしたが、脳活動の測定や解析に積極的に取り組んでいました。こうした大学間交流・国際交流が本学の学生にとっても大いに刺激になったようです。ご協力いただいた先生方、どうもありがとうございました。

文責：脳神経生理学、認知機能病態学

04 お知らせ Information

医学部医学科秋のオープンキャンパス2025

令和7年10月18日（土）、名古屋市立大学・桜山キャンパスで医学部医学科秋のオープンキャンパスが開催されました。高校生や保護者など約300名が参加し、本学医学部の教育内容や入試情報、学生生活について理解を深める貴重な機会となりました。学生代表による受験勉強や学生生活の体験談、教授陣による模擬講義では短時間ながら実際の講義を体験し、参加者は本学医学部をより身近に感じられる時間となりました。加えて、個別相談ブースでは、教授や在学生が来場者と直接対話を重ね、一人ひとりの興味や疑問にお応えしました。今後もこうした機会を通じて、多くの志願者に本学医学部の魅力を伝えてまいります。次回の開催もぜひご期待ください。 文責：医学部事務課



医学部解剖感謝式

2025年度の解剖感謝式が10月21日（火）の午後にしめやかに執り行われました。式には、献体者ご遺族の他、公益財団法人「不老会」（篤志献体団体）役員と会員の皆様、肉眼解剖学実習を履修した医学部医学科2年生と実習を見学した医学部保健医療学科看護学専攻・リハビリテーション学専攻1年生、ご献体による手術手技研修を受講した医師と歯科医師、および、医学部と同附属病院群の教職員、大学役員が参列し、ご成願された209柱の御靈のご冥福が祈念されました。式では、医学科2年生の服部妃夏さんによる学生式辞に続き、ご成願者のご芳名が奉読され、終わりに片岡洋望医学部長が御礼の言葉を述べました。名市大の学生、教職員、医療従事者は、ご献体者の崇高なご遺志を汲み、今後も医学の発展に向け精進して参ります。 文責：統合解剖学 教授 植木 孝俊



水谷孝文賞自己研鑽助成費授与式を行いました

名古屋市立大学病院初期臨床研修プログラムでは、故水谷孝文先生（名古屋市立大学医学部同窓会初代会長）・水谷浩明先生（八事病院理事長）の御厚意により、研修医育成基金をいただきながら、当院の初期臨床研修を充実したものにすべく努力しています。その基金は研修医の学会参加や発表研究の論文化に必要な資材や機材の購入に利用させていただいています。そして、当院での研修に熱心に取り組んでいる研修医に対して、水谷孝文賞を授与しています。令和7年度も4名の研修医が水谷孝文賞に選出されました。4名の受賞者は12月1日に開催された初期研修フォーラム2025に出席し、それぞれの研修生活の様子を示すプレゼンをしました。受賞された4名の先生方には、今後さらに研鑽を積み重ね、名古屋市立大学の一員として医学の発展に大きく寄与されることを期待します。 文責：総合研修センター センター長 村上 英樹



4年連続フルマッチ達成しました

2026年度の卒後臨床研修マッチングで、名古屋市立大学病院は昨年に続き、4年連続フルマッチを達成しました。この成果は、当院の初期研修プログラムの魅力が広く認知された結果と考えています。当院では、4つの研修プログラムを提供しています。1) 2年間の大学初期研修、2) 連携病院とのたすきがけ研修、3、4) 小児科・産科婦人科重点研修コースで、個々の研修医のキャリアプランに応じた研修が可能です。特に、たすきがけ研修では、一年目を連携病院で行うことにより、一般的なcommon diseaseに関する経験を多く積み、二年目には本学に戻り、難治性疾患や希少疾患の学習を通じて、幅広い疾患や治療の経験を積むことができる点が評価されているようです。また、メンター制度を通じて研修の進捗状況の把握や総合的トータルサポートを行うなど、きめ細かい研修医ケアにも力を入れています。今後は、初期研修修了後も本学に残って専門研修を続ける専攻医が益々増えるよう努力して参ります。

文責：総合研修センター センター長 村上 英樹



大型研究費獲得勉強会シリーズ～科研費 AMED編～

令和7年12月17日に「大型研究費獲得勉強会シリーズ（AMED編）」を開催しました。

本学では、研究力強化の一環として、研究・産学官連携推進機構会議 研究力強化部会（部会長 木村幸太郎学長補佐）により、大型研究費獲得勉強会シリーズを新たに実施しております。

今回は、第二弾として日本医療研究開発機構（AMED）が公募する大型研究費についての勉強会を開催し、多くの教員に参加いただきました。講師にはAMED 久米秀明様と医学研究科 明智龍男教授をお招きし、事業の概要、応募に向けた実務的事項、審査や運営の特徴などを紹介いただきました。講演後の質疑応答では、多くの質問が寄せられ、活発な議論が交わされるなど、有意義な時間となりました。

今後も外部資金獲得に向けた支援や研究活動の充実に努めてまいります。

※AMED…医療分野における研究開発を支援する国の機関で、研究費の提供や研究プロジェクトの推進を行っています。



文責：学長補佐（研究力強化）木村 幸太郎

ハルリム大学医療センターへ各病院看護部が見学に行きました

本学とハルリム大学は、2025年5月に両国間の看護分野における国際交流と協力を推進するため、「看護師国際交流に関する協定覚書（Memorandum of Understanding）」を締結しました。

第1弾として同年12月に附属病院群看護部長6名と看護学研究科教員4名がハルリム大学ドンタン・ソンシン病院・ソンシン病院を訪問し、看護交流協力イベントを開催しました。先方からはユン看護部長はじめ多くの職員の方に参加・協力頂きました。懇親会では、本学の郡理事長、ハルリム大学のユン理事長、キム医療院長等にも参加頂きました。

今回は『医療DX』をテーマとし、シミュレーションセンターやスマート病棟、コマンドセンター、看護教育専任チームによるVR教育の実際、EMRやロボットステーションなどの紹介・見学・意見交換を行いました。日本における働き方改革等課題に対して、何をねらいとしDXにより何を解決するのかの明確化が必要であると実感しました。今後は、ケアテクノロジーの開発や患者中心の医療実践への協力も展望しております。

また教育について、発展的な取り組みだから是とするのではなく、その効果にも着眼し、大学病院だからこそ実現できる継続教育について議論を深めていきたいと考えます。

文責：名市大病院 看護部長・副病院長 山本 あゆみ



救急災害医療センター 準備状況について／名市大病院

2026年6月1日の開棟に向け、「救急災害医療センター」では、施設整備、診療体制、多職種連携の強化を中心に準備が着実に進んでいます。センターの理念整理、診療プロトコール、災害医療計画、多職種協働モデルなど、運営の基盤となる仕組みづくりを市大病院全体で進めており、27のワーキンググループを軸にすべての職種が一体となって開棟準備に取り組んでいます。2025年11月1日には船越拓教授が救命救急センター長に着任し、専門性とデータに基づくセンター整備が一層加速しています。

新センターは延床面積27,600m²を有し、初療室10室（内、ハイブリッドER1室）、CT・MRIなどの放射線検査室を同一フロアに配置し、「1秒を大切にできる動線」を実現しています。さらに、手術室4室、GICU・PICU10床、CCU6床、EICU8床、EHCU12床、HCU8床を整備し、年間約1万人規模の救急搬送に対応する三次救急体制を備えています。

また、本センターの大きな特徴として屋上ヘリポートの強化が挙げられます。ヘリポートは総重量11トン程度の着陸に対応した堅牢な構造で、ドクターヘリに加え、消防・警察・自衛隊が運用する中型救難ヘリ（UH-60Jなど）の受け入れが可能です。赤色背景に白色の「H」マークを配したデザインにより都市上空からの視認性を高め、周囲には「ELEV.18.5M」「MAX WT 11T」を明示し、航空運用の安全性を確保しています。CH-47級など20トン超の大型輸送ヘリは着陸できませんが、災害時には近隣の臨時着陸場（LZ）と連携した広域搬送を可能にします。

災害医療では、免震構造を採用し最大300床の仮設病床を展開できる全国的にも稀有な災害拠点病院として整備されました。南海トラフ地震を想定した事業継続機能の強化、災害シミュレーション、多職種訓練も段階的に拡充しています。

さらに、名古屋市消防局と連携したE-Stationを発足し、救急隊とのリアルタイム情報共有、救命士によるファーストタッチ体制など、搬送から初療までの時間短縮を進めています。ドクターカーも試行運用を開始し、24時間体制に向けた準備が続いています。

「地域の命を、未来へつなぐ」をブランドコンセプトに掲げ、地域とともに歩む救急・災害医療の新たな中核拠点として、開棟に向けた準備を力強く進めています。

文責：副学長・名市大病院副病院長・救急災害医療センター長 森田 明理



「救急の日」記念イベント開催／名市大病院

令和7年9月9日、市大病院では「救急の日」にちなみ、日本最大級の救急災害医療施設「救急災害医療センター」の開棟（令和8年6月1日予定）に向けた記念イベントを開催しました。大ホールではポッカレモン消防音楽隊の演奏や水辺事故防止活動「サンダルバイバイ」の紹介、DMAT隊員による被災地域での活動報告、胸骨圧迫レースなど多彩な催しが行われました。屋外ではVR起震車「NGKクロコくんシミュレーター」による南海トラフ地震体験や消防キャラクター「ケッシャイ」「ジジョ」との写真撮影も人気を集めました。市民の皆さんとともに救急・防災の大切さを考える有意義な一日となりました。



文責：名市大病院 E-ステーション運営室

「いいお産の日」のイベントを開催しました／東部医療センター

11月3日、「いいお産の日」イベントを東部医療センターにおいて開催いたしました。本イベントは毎年、西部医療センター助産師との合同にて実施しておりますが、今年度は助産学生も多数参加し、例年以上に活気ある催しとなりました。

当日は、妊婦の方をはじめ、子育て中のご夫婦や祖父母の方々など、幅広い層の皆様にご来場いただきました。各種教室のほか、マタニティヨガやベビーマッサージ等の体験型プログラムは非常に好評であり、参加者同士の交流を促進する場としても大きな役割を果たしました。また、助産師が演じるお産劇では、陣痛への向き合い方や出産までの過程を分かりやすく表現し、多くの参加者から感動の声が寄せられました。

さらに、異なる現場でお産に携わる助産師や、助産師を志す学生との交流は、主催者にとって多くの学びを得る貴重な機会となり、極めて有意義な一日となりました。

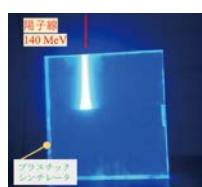
文責：東部医療センター6階東病棟 師長 石川 美江



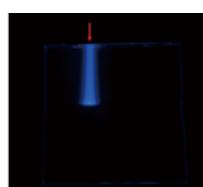
陽子線FLASH照射による難治性脳腫瘍癌根絶へ向けた開発／西部医療センター

陽子線治療は次世代の放射線治療として世界的に普及が進んでいますが、難治性脳腫瘍では正常脳組織の耐容線量が制約となり多くの課題が残ります。近年、40-60 Gy/sec 以上の超高線量率照射により、抗腫瘍効果を保ちつつ正常組織障害が低減する“FLASH効果”が革新的な技術として注目されています。当院は臨床と基礎研究の両方を行う数少ない施設で、国内最多の患者数の治療を行うとともに、大学医学部・薬学部などと研究体制を整えることで科研費基盤Bを獲得しました。陽子線超高線量率照射の様々な生物学的事象やその原因遺伝子の解明を試みており、国内初の臨床応用へ向け多方向・多分野への開発・展開を行っています。FLASHを活用した共同研究も募集しております。

文責：西部医療センター 陽子線治療科 准教授 岩田 宏満



超高線量率照射(FLASH)
300 Gy/s
15 Gy/shot



通常照射 (Conventional)
1.5-3 Gy/s
7 Gy/shot



04 お知らせ Information

低線量CTとHRCTで行う呼吸器専門健診／みどり市民病院

当院の肺ドックは、肺がん、COPD、間質性肺疾患などの早期発見を目的とした専門健診です。低線量CTを用いることで被ばくを抑えつつ、微細な肺結節や気腫性変化を高精度に評価し、肺がんやCOPDのスクリーニングに活用します。さらに、間質性肺炎などの微細な線維化や間質病変は、HRCT（高分解能CT）で精密に診断可能です。画像は呼吸器内科専門医と放射線科専門医によるダブルリーディングで解析し、診断の精度を高めています。また、喫煙歴や家族歴などのリスクに応じて丁寧に説明し、生活習慣改善の提案や必要に応じた専門診療への連携まで一貫してサポートします。無症状の段階で病変を捉えることが、将来の健康維持の鍵です。

文責：みどり市民病院 健康管理センター



病院開放イベントを開催しました／みらい光生病院

みらい光生病院では、11月15日（土）に病院開放イベントを開催しました。当日は、医師による認知症予防や和のwell-beingに関する講演のほか、日本舞踊西川流・西川まさ子様による踊りの体験型講座など、多彩なテーマで公開講座を実施しました。また、院内各部門による健康体験ブースも設け、糖尿病・肌ケア・排尿トラブルなど、身近な健康課題に関する展示や相談を実施しました。今年度は医学部保健医療学科の学生による「ひらめき脳トレゲーム」も実施され、多くの方に楽しんでいただきました。参加者からは「様々なブースがあり参考になった」との声も寄せられ、健康未来に向けて生涯現役であるためのヒントを地域の皆さんとともに考える有意義な機会となりました。

文責：みらい光生病院 経営課



西川まさ子様による日本舞踊の体験講座



医学部保健医療学科の皆さん

リハビリテーション病院、初の開放イベントを開催!／リハビリテーション病院

リハビリテーション病院では、2025年11月30日、当院初となる一般開放イベント「第1回ふれあいフェスタ in みかんやま」を開催いたしました。本イベントは、地域連携の強化に加え、次世代を担う子どもたちに「本物の医療」に触れてもらい、未来への関心を育むことを目的としています。当日は、普段立ち入ることのできないMRI検査室での磁場体験やリハビリ機器の操作、「減塩クイズ」など、大学病院ならではの企画を実施しました。真剣な眼差しで医療機器に触れる子どもたちの姿が印象的で、楽しみながら、多職種が連携する病院の姿を学んでいただく貴重な機会となりました。今後も地域に信頼される病院を目指してまいります。

文責：リハビリテーション病院 経営課



MRIの強力な磁力を体感する子どもたち

自動車運転に関する支援者向け研修会開催／リハビリテーション病院

2025年12月21日、桜山キャンパスにて「自動車運転に関する支援者向け研修会」を開催しました（名古屋市総合リハビリテーション事業団と共に）。昨年4月の運営移管後も、当院と名古屋市総合リハビリテーションセンターが「医福連携」のモデルとして機能し、地域への支援姿勢を示す好機となりました。12月16

日の「高次脳機能障害者支援法」成立直後の開催となり、会場は高い関心に包まれました。講師の渡邊修医師（当院非常勤医師・日本安全運転医療学会理事長）は、新法による「医療の空白」解消への期待や、脳機能と事故リスクの関係等を解説しました。今後も連携を深め、支援体制の構築を目指します。

文責：リハビリテーション病院 経営課



スポーティーブライブ in 瑞穂にブース出展しました／医学部保健医療学科リハビリテーション学専攻

2025年11月23日、パロマ瑞穂スポーツパークで開催された「スポーティーブライブ in 瑞穂」に体力チェックブースを出展し、総勢121名の皆さんにご参加いただき盛況のうちに終了しました。

体力チェックブースは、垂直飛び、膝伸展筋力、跨ぎテスト、および片足立ち上がりテストを設置し、測定結果を年代平均と対比させながら小さなお子さんからご高齢の方まで幅広い年代の方に体験いただき、皆さんのスポーツや健康に向けた現在地を共有することができました。

今後もスポーツイベントを通じて本学医学部の魅力を積極的に発信し、スポーツや健康の増進を通して名古屋市の社会貢献に取り組んでまいります。

文責：医学部保健医療学科 リハビリテーション学専攻 教授 池田 崇



高校生1日看護体験研修／名市大病院

高校生一日看護体験は、毎年各都道府県の看護協会が中心となり、高校生が看護の場を体験・見学する研修です。目的は、今後の社会を担っていく世代に看護の心を理解してもらうとともに、この体験を契機として看護職を志望する若者の増加を図ることです。

令和7年8月6日(水)に、当院も34名の高校生に看護体験をもらいました。看護ユニフォームを着て、辞令を受け看護師の役割や業務についての講義のあと、病棟での看護体験を行い、血圧測定や車椅子の試乗体験、移送の体験等を行いました。

看護体験後「看護師になりたいという気持ちが強くなった」「看護師になり4年後にこの病院で働きたい」と意見がありました。

将来を担う看護職志望の方々が増えるよう今後もより良い看護体験を継続していきます。

文責：名市大病院 看護部

